

〔研究ノート〕

前田愛『都市空間のなかの文学』から

一九八〇年代以降の「都市論」について考える

廣瀬 航也

一 問題の所在

前田愛『都市空間のなかの文学』は、一九七五年六月から一九八二年九月に至る彼の都市論的な論稿をまとめたものとして、一九八二年一二月に上梓された。同書は日本近代文学研究における都市論の体系を構築したテキストであり、現在に至るまで影響を及ぼしていると言って良い。その序章にあたる論文「空間のテキスト テクストの空間」は、本書全体に通ずる理論的基盤として位置付けられ、現代でも影響力を有していると言えよう。

テキストからつくりだされる虚の「空間」のひろがりとは、同時にまた読者の想像力のひろがりとその限界を指し示しているのである。とはいえ、じつさいの読書過程では、この虚の「空間」は、むしろ心の視野の周縁部分に押しやられていることが

多いだろう。読者が心の視野の中心部に見すえているのは、ふつうは作中人物の心理や行動であり、プロットの展開であるからだ。しかし、〈図〉として志向されている中心部分の意味を限定し、鮮明な像として浮きあがらせているのは、無意識の領域でサブ・ストラクチャーとして構造化されている〈地〉の部分、つまりはテキストの「内空間」なのである。作中人物の生の地平を開示し、限定する枠組みとして作用しつづけるテキストの「内空間」の役割は意外に見過されている。

文学テキストの読者は、語り手の視点を所有することで、あるいは作中人物が欲望や期待をはらみながら周辺の事物や他の人物にふりむけるまなざしを共有することで、テキストの「内空間」を生きはじめ⁽¹⁾る。

ここで前田は、〈図〉すなわち作中人物やプロットと、〈地〉すなわちテキストの「内空間」の反転を試み、読者が語り手や作中人物

の視点を共有し、テキストの「内空間」を生きはじめの様態をとらえることを試みた。これは所謂「近代的自我」の問題を相対化することを目論んだものであり、後の論文においても、『都市空間のなかの文学』の試みはそこにあり、作中人物や語り手の内面乃至自我は、外部世界すなわち都市との関係において立ち現れるものであると述べている。⁽²⁾

このような前田の議論を継承して、田口律男は「都市テキスト論」の理論の構築を試みた。「都市テキスト論」とは、「Ⅰ 物語内容の審級における身体／都市／政治力学」と「Ⅱ 物語言説の審級における表象／テキスト／読書行為」を接合させ、「言葉によって表象された都市空間／言説空間のダイナミクスを吟味しようとするものである」⁽³⁾。田口は、前者（Ⅰ）がテキスト論と相性が良いことを指摘し、注釈作業・空間論・身体論的アプローチを伴う議論を展開する点において、八〇年代の都市論ブームと接点を有すると指摘する。そして後者（Ⅱ）を、身分け／言分けによる世界の分節化を経て、読書行為のレヴェルで考えることを志向する。田口は、前田をはじめとする構造主義的な都市論が都市空間の構造化を旨としてきたことには批判的であり、言語行為・読書行為のレヴェルでテキストを分析していくことを主張する点において、前田の議論を発展的に継承したと言えよう。しかし、『都市空間のなかの文学』が抱える論点は様々であり、田口のものとはまた異なった議論の開き方が試みられても良いだろう。

近年では、日高佳紀・西川貴子が、『建築の近代文学誌 外地と内地の西洋表象』の「はじめに」において前田愛「空間のテキスト

テキストの空間」を参照し、前田がこれまで「地」としてあつた空間表象を「テキストの「内空間」や「読書行為」の問題へ展開させたことを踏まえた上で、それが「具体的・歴史的な事象との関わりにおいて捉え直す」余地があることを主張する。⁽⁴⁾ここで挙げられる「歴史」という論点は、前田の議論においても明確化されているものの、八〇年代都市・都市論の文脈ではあまり省みられてこなかったように思われる。

『都市空間のなかの文学』刊行当時の書評に鑑みれば、当時『都市空間のなかの文学』は様々な論点から言及・検討がなされたテキストであることがわかる。例えば、「（引用者注：前田にとって）〈近代〉の人間とは、生活空間としての手ごたえが乏しい均質化されたのっぺらぼうの都市の中で、孤立や不安を強いられ、ひそかに〈内なる都市空間〉を仮構し、その内部を彷徨し続ける宿命を負う人間、ということになる」⁽⁵⁾という浅野洋の見解や、「本書の基本モチーフの一つが、都市空間にちりばめられたさまざまなもの（文化的コード）と、文学作品の作中人物の意識との相関の分析にあるように思える」⁽⁶⁾という中島国彦の見解は、まさに八〇年代の文化的コンテキストを踏まえた『都市空間のなかの文学』の理解と言って良い。また「空間の成立にとって時間Ⅱ歴史が絶対必要である」⁽⁷⁾とした米田利昭のように、都市の歴史性の発掘に『都市空間のなかの文学』の意義を認めるものもある。亀井秀雄は、「いわば〈制度〉の枠組でありながらもその〈制度〉が溶解し流出してしまふ領域こそが、「都市空間のなかの文学」を成立させる場所だったわけである」と評価しながらも、「サルトルやポンティエの「可能性を生きる身体」の認識

がなく、だからまたその身体存在の行動の構造として作品内の「内空間」をとらえる視点が欠けている」がゆえに、「作品内の「内空間」に関する「生きられる空間」というとらえ方が、前田愛の場合まだ単なるコトバとしてあるにすぎないのではないか」、と苦言も呈している⁽⁸⁾。

現在の都市論の地平を考えるにあたり、『都市空間のなかの文学』において提示された多様な議論の枠組みは、改めて掘り起こされる必要がある。その際、『都市空間のなかの文学』が刊行された一九八〇年代という時代の問題、及び今日に至るまでの八〇年代に関する言説は、改めて検討されるべきであろう。

斎藤美奈子・成田龍一は、一九八〇年代は「戦後の転換点」であると同時に、「いま」の源流⁽⁹⁾」としてあると述べている。それはアカデミズムの文脈でも同様であり、大澤聡は、当時の記号消費型の社会動勢に合致する形で「現代思想ブーム」「ニューアカブーム」が起こり、研究のスタイルが刷新されたことを指摘している⁽¹⁰⁾。前田愛が基盤とする記号論的・空間論的・構造主義的な議論の枠組みは、七〇年代頃から始まったものであるとはいえ、八〇年代の思想の動向と合致したものであると、ひとまずは言って良いだろう。

また一九八〇年代は、所謂「都市論」ブームの時代とされ、その代表格として『都市空間のなかの文学』はしばしば言及されてきた。吉見俊哉は、七〇年代後半以降の都市論の多くが「都市を「読まれるべきテキスト」として捉える点で共通している」とし、その記号論的・空間論的「都市論」の旗手として前田愛を挙げている⁽¹¹⁾。また若林幹夫は、「都市空間が消費を楽しむための舞台装置としてあつ

らえられ、また読み解かれた」記号の時代において「都市論」ブームが起こったとして、その筆頭に『都市空間のなかの文学』を掲げている⁽¹²⁾。このように、『都市空間のなかの文学』が上梓された一九八〇年代は、当時の社会状況及び批評のパラダイムとともにある「都市論」ブームの只中にあつた。それでも、八〇年代の「都市論」が「都市空間や都市の文化、都市を生きる人びとの身体に注がれた当時の視線のあり方を伝えつつ、そうした〈都市論の時代〉を生み出した当時の都市と社会のあり方に、すでに批評的な視線を投げかけていた」と若林が述べているように、『都市空間のなかの文学』が八〇年代的な都市論を相対化する契機を孕んでいることも確かであり、それは改めて検討されるべきであろう。

以上の前提をもとに、本稿では前田愛『都市空間のなかの文学』を一九八〇年代の文脈の中で捉え直し、現在の「都市論」の地平を考えることを目的とする。先走って述べれば、「都市論」ブームが起こった八〇年代という時代の問題を整理した上で、『都市空間のなかの文学』の表現を辿り、都市の流動性と都市を越境する主体、及び都市の歴史性の問題を指摘したい。

二 記号の時代

本節では、一九八〇年代の「都市論」と実際の都市の様相が如何なるものであるかを確認し、『都市空間のなかの文学』について考える視座を得ることを目的とする。

若林幹夫は、渋谷パルコに代表されるような「都市空間の表層の

記号論的な再編成が、社会の消費社会化と連動して進められ、「カタログ雑誌や情報誌、テレビ・コマーシャルなどが、この虚構化し記号化した都市空間に積極的に言及してい」ったと述べている。そして、このような現実の都市空間の様相と相關する形で、一九八〇年代の都市論が展開されたことを指摘している。¹³ この認識は、都市社会学の分野を中心に広く共有されていると言って良い。北田曉大も、「(八〇年代)」を席卷した「文化記号論」「消費社会論」的な議論が、「広告」都市の方法論とほとんど同型の構造を持っていた」と述べている。そして、人々は記号に包囲された空間の中で消費活動を営み、記号によって自己を形成していくことを強いられると指摘している。¹⁴ 渋谷・パルコに代表されるこのような都市の様相は、一九八三年に開園した東京ディズニーランドにおいて極められ、さらに若林が述べているように、記号消費的な都市のありようは日本全国に行き渡り、現在に至る「なめらかで均質な」都市景観が形成された。¹⁶ 無論、これも多くの論者が指摘するように、記号と消費の都市においては、個人の自我や都市の流動性、「伝統的な都市の空間のような物質的な厚み」や「象徴的な全体性」、さらには歴史性が無化されてしまうのである。¹⁷

このような八〇年代都市及び「都市論」の影響は、文学の分野においても確認でき、川本三郎『都市の感受性』はその代表と言って良い。

都市は日々、激変していく。急速な時間の変化の中で姿を変え、空間を歪形する。そこでは連続性というものがない。モノ

だけではなく、時間も空間も、そして最終的には自己自身も使い捨てられていく。(中略)

昨日まであったビルが破壊される。そのビルに愛着を持つことで支えられてきた個のアイデンティティは、散らばったコンクリートの細片のように無意味さのなかに散乱していく。私たちはもう新しく建てられるビルのなかにすでに将来の破壊を予定して“壊しやすいように”ビルの内部にダイナマイトを埋め込んでおく工法があることを知っている。(中略)

連続性を失なった都市では「真の自己」とか「主体性」といった確固たる定点を想定することは困難になってくる。建設と破壊がめまぐるしくサイクルしていくエンドレスな都市のなかでは、ひとはますます有機的実体をなくし、過去や現実世界との連続性のない浮遊物になっていく。¹⁸

いうまでもなく現代の都市は、人間臭い生活の場所というよりは、より無機的で殺風景な情報・記号がとびかうまるでテレビのような(あるいはまるでカタログ雑誌のような)フラットな空間である。そこでは「生活のリアリティ」や「人間の存在感」といったものは消えうせている。いや、そもそもそうした生々しい人間の息づかいが都市のなかにはじめから入ってくる余地がない。都市はいま生活の場というよりはさまざまな記号・象徴の交差しあう抽象的な空間としてあらわれているのである。都市空間は生活の場からシンボリズムの世界・象徴の体系へとその様相を変えてきているのだ。¹⁹

川本は、破壊されるビルと個々のアイデンティティをイメージの

レヴェルで重ね、めまぐるしく変化する無機質な都市においては時間的・空間的連続性が存在せず、個人が「真の自己」や「主体性」を見出すことが不可能であることを指摘している。また、「人間一人一人の個性を無化してしまうような、空間としての都市の感受性」⁽²⁰⁾があるとして、「生活の場」というよりも記号が浮遊する象徴空間として都市を捉えている。その後川本は『都市の感受性』において、八〇年代都市を代表する作家として村上春樹や村上龍を挙げているが、例えば春樹のテキストが記号の集積として読まれていくのは、現在からすれば興味深いように思われる。デビューから八〇年代半ばにかけての春樹は、川本三郎との対談が催されたことから分かるように⁽²¹⁾、当時の記号的な都市との親和性が、本人も自覚するような形で認められていたように思われる。その後春樹はそのような文脈から離れていくことになるが、七〇年代末から八〇年代半ばにかけての春樹テキストが、ポップでアメリカな記号の集積として享受されてきたことは、当時の文化的状況や都市空間の様態、さらにはそれらをめぐる言説が、テキストのあり方やその解釈に大きな影響を与えたことの証左となろう。

以上、本節では記号とその消費の空間としてあった現実の都市と相關する形で、一九八〇年代の都市論ブームが展開され、文学の分野にまでも影響を及ぼしたことを確認した。このような問題を踏まえ、前田愛『都市空間のなかの文学』は八〇年代の文脈にどのような位置づけられるだろうか。

三 前田愛『都市空間のなかの文学』再考

(一) 記号の時代への接近

一九八〇年代の都市と文学を語るに際し、必ずと言って言及されるのが、田中康夫『なんとなく、クリスタル』(『文藝』、一九八〇年十二月)である。

一九七八年のポール・デイヴィスのヒット曲、「アイ・ゴー・クレイジー」²⁵が、かきり始める。

〈アイ・ゴー・メランコリー、アイ・ゴー・グルーミーだわ〉²⁶と思いつながら、ベッドの下に落ちているセーラムの箱を拾い上げてみる。枕元にあったデイスコのマッチで、火をつける。

深く吸い込んでみると、メンソールの味が肺の中へとひろがってくる。でも、相変わらず気分はたまらなくグルーミーなままだ。

昨日デイスコへ行ったせいか、随分とよく眠ったのに、ブワーンという感じの軽い耳鳴りがまだ残っている。³¹

25 ●ポール・デイヴィス アトランタ出身のシンガー||ソングライター。

26 ●「アイ・ゴー・クレイジー」 I Go Crazy

27 ●メランコリー melancholy

28 ● グルーミー gloomy

29 ● セーラム Salem アメリカのタバコでメンソールの味。ロ
ング・サイズもあります。

30 ● メンソールの味 ハッカ味。一時、メンソール・タバコを
吸うと、インポテンツになるというウワサが流れました。でも、
今のところ、メンソール公害の認定患者は一人もでていません。
31 ● 耳鳴りがまだ残っている ディスコの従業員やD・Jとし
て一年も勤めていると、耳が遠くなります。新しい公害病の一
種でしょうか⁽²²⁾

『なんとなく、クリスタル』において特徴的なのは、本文の表現
と一対一の対応関係で結ばれた「NOTES」と題された注である。
またテキスト全体を通して列挙される固有名は、まさに現実の都市
空間と一対一の対応関係を結ぶ記号である。このようなテキストの
性質は、文学の分野のみならず、広く八〇年代の文化を特徴づける
ものとして語られてきた。例えば北田暁大は、「記号の秩序の外部
は存在しない」都市において記号を消費する存在に「(八〇年代)
に生きる人びとのリアリティ」を認め、『なんとなく、クリスタル』
を八〇年代、さらには現在を象徴するテキストとして位置付けてい
る⁽²³⁾

前田愛も例に漏れず、『都市空間のなかの文学』において、『なん
となく、クリスタル』に言及している。

『なんとなく、クリスタル』は、発表の直後からカタログ誌やタ

ウン情報誌との類似が指摘されていた。たしかに四百以上にも
及ぶ注には、ファクションやレストランの情報がぎつしりと詰
めこまれている。しかし、問題にしなければならないのは、個々
の情報であるよりもむしろテキスト総体の構造であるだろう。
『なんとなく……』の末尾につけられている約四〇ページのN
OTESは、常識的には物語テキストに付随する二次的なテク
ストであるかのように考えられているが、かりにこの二つのテク
ストを等価と考えたらどうだろうか。読者は注のナンバー毎
に末尾のNOTESをいちいち確かめる手続きを欠かせない
はずで、物語的時間の自然な流れはその都度中断される。この
読書法は、おそらく索引を手がかりに風俗やイベントの情報を
検索するカタログ誌やタウン情報誌の使用法に近似したもの
になるにちがいない。はじめから終りまで読みすすめる文学読
書のタテマエから、私たちはこうした辞書的な読み方を拒絶す
るが、このテキストが物語的時間を解体し、無化して行く非文
学的な構造を潜在させていることは確認しておく必要がある。
カタログ誌やタウン情報誌のスタイルとホモロジカルなテク
スト構造なのである。カタログ誌やタウン情報誌にあつめられ
た情報は、原則的には価値の序列が消去されている無機的な点
の集合に見立てることができる。テキスト自体には点と点を連
結するベクトルは与えられておらず、それらの点は使用者の欲
望に応じて恣意的に選択され、配列されるのだ。(中略) 一つ一
つのモノは消費記号としてののはっきりした顔立ちをもってい
るが、全体としてはほとんど無意味な集積体に反転してしまう

テキスト——『なんとなく、クリスタル』という撞着語法ふうのタイトルは、そうした構造を括りこんだ暗喩としてうけとめることができるだろう。⁽²⁴⁾

ここで前田は『なんとなく、クリスタル』の膨大な「NOTES」に言及し、それを読書行為のレヴェルで検討している。ここに、本稿冒頭に掲げた前田の論点を伺うことが可能であろう。しかし前田は同時に、『なんとなく、クリスタル』とカタログ誌やタウン情報誌との類似性を指摘し、「消費の記号」という語を以ってテキストを分析していく。

このように電話帳という「書物」は、現実の都市空間と一対一の写像——逆写像の関係をもっているが、このモデルはビュートルの文章には出てこないタウン情報誌にもあてはまるだろう。たとえば、「ぴあ」につめこまれている都市の情報、「映画」「演劇」「音楽」「ニューディスク」「FM」「美術」「イベント」「講座」「新刊」というように、九つの項目に分類されている。目次のすぐ下にあるルート・マップは、国鉄・私鉄・地下鉄の各駅が一目で判る概念図で、地域別に切り分けられた情報の索引ともなる案内図も駅中心に構成されている。これはクルマで移動する人びとに見えてくる都市ではなく、電車を利用し、歩行をたのしむ若い世代に見えてくる都市である。つまり、一方には駅を中心に気に入った映画、演劇、イベントを求めて都市空間を探索する歩行者のイメージがあり、他方には密室にこ

もってFMやステレオの音楽に耳をかたむける孤独な若者のイメージがある。盛り場と個室の両極を生きている「ぴあ」の読者は、電話帳がそうであるように小さな活字がギッシリと組まれている表としての書物を媒介に自分自身の「都市」をつくりだす。電話帳の効用について語ったビュートルの語り口をかりるならば、かれらにとつて東京という都市は、タウン情報誌を内包すること、はじめて都市たりうるのである。しかし、この「都市」は、いうまでもなく現実の東京そのものではない。日常的な都市空間——ビジネス街や住宅地についての情報は空集合になっているからである。「ぴあ」や「シティロード」からたちあがつてく「都市」は、みるときに集約される欲望の記号の束がカタログ的に編成されている都市なのだ。⁽²⁵⁾

ここで前田は、電話帳、さらには「ぴあ」に代表されるタウン情報誌に言及し、それらが「現実の都市空間と一対一の写像——逆写像の関係をもっている」ことを指摘する。そして、「東京という都市は、タウン情報誌を内包すること、はじめて都市たりうる」、「「ぴあ」や「シティロード」からたちあがつてく「都市」は、みるときに集約される欲望の記号の束がカタログ的に編成されている都市なのだ」と主張する。

現実の都市と一対一の対応関係を結ぶ記号の集積であるタウン情報誌により、現実の都市が記号的に再編成されるという都市に対する認識は、当時を席卷した記号消費型の都市・都市論と重なりを見せる。『都市空間のなかの文学』では他にも、池田寿美夫「エーゲ

海に捧ぐ」(『野生時代』、一九七七年一月)を中心的に扱った章「紙のうえの都市」において、同様の議論が展開されている。ここでは、タウン情報誌におけるイメージや記号が、都市に生きる人々を包み込み、それが日常的なコミュニケーションのレヴェルにまで影響を与えていることが指摘されている。⁽²⁶⁾それはまさに章の題である「紙のうえの都市」に集約されるものであり、初出が一九七七年であることに鑑みれば、前田が八〇年代的な都市・都市論をいち早くとらえていたことの証左となろう。しかし、前田は八〇年代的な記号消費型の都市・都市論に接近しつつも、それに迎合しない批評意識を確かに有していた。

現代の都市は、こうした二極構造そのものがしだいに隠蔽される傾向をつよめている。現代の都市に浮遊しているおびただしい記号と情報は、そのひとつひとつをとりあげてみれば、完結した記号体系として事物に対応しているが、それらの情報が集積されるにしたがって、外界との結びつきは失なわれ、個々の情報をもっていた特性も相殺されて、総和としては無色透明な世界に還元されてしまう。私たちの日常生活に浸透してきたのは、リアルな事物からは切りはなされたおびただしい記号と情報がおびただしい、複雑なブラウン運動をくりひろげているもうひとつの環境であって、それは可視的な都市の背後にかくされた虚体の都市としてまぎれもなく実在している。この虚体の都市をどのような方法で描きだすかは、これからの都市小説に課された重要な課題である。⁽²⁷⁾

引用部は前田が『都市空間のなかの文学』刊行後に発表した論文の一節であるが、ここで前田は、現代の都市について、完結した記号体系としての情報が張り巡らされ、外界やリアルな事物との結びつきが失われた環境であることを指摘している。波線部「二極構造」という語も相まって、このような前田の見解は記号論的・構造主義的な文脈に接続される語のように思われる。しかし前田は、八〇年代的な表層的な記号と、「二極構造」という語に代表される都市の構造は明確に区別し、前者を相対化し批判する要素としてこの語を用いている。同論文で前田は、七〇年代以降の都市論について、「有用性の機軸——行政・生産・交通・交換——から、都市を構成している個々の要素を分割し、統合して行くこれまでの分析手法にたいして、むしろ有用性のネットワークからはみだす部分、そこに生きる人間の気分や欲望の感光板としてあらわれる都市の深層的な部分を記号論的に解読する方法を提起した」との認識を示し、「生きられた空間として都市、人間的意味に浸された柔かい都市の再発見は、とりもなおさず、画一化と均質化を加速させている都市の現状への批判に他ならなかった」と述べている。⁽²⁸⁾この「画一化と均質化を加速させている都市」を八〇年代的な都市であると理解すれば、『都市空間のなかの文学』は「生きられた空間として都市」「人間的意味に浸された柔かい都市」の発見を志向し、そのために眼差しが向けられるのが「都市の深層的な部分」であり、「二極構造」であったのである。

では、そのような都市の契機は、『都市空間のなかの文学』でど

のように見出され、論じられていくのだろうか。

(二) 都市の流動性と歴史性

ここで改めて、『都市空間のなかの文学』の理論的基盤である「空間のテクスト テクストの空間」の記述を参照する。これまであまり注目がなされてこなかったように思われるが、「内空間」の議論を導入するにあたり「空間のもつとも本質的な属性が切れ目のないこと、連続性にある」⁽²⁹⁾と述べているように、前田が「空間」を論じる際の根底にあるのはその連続性である。先に「二極構造」という語を確認したが、『都市空間のなかの文学』における少なからぬ論稿が、空間を「オモテ／ウラ」「ウチ／ソト」のように二項対立的に分けるところから始まることを考えれば、このような前田の認識は不自然にも思われよう。しかし、例えば森鷗外「舞姫」『国民之友』、一八九〇年一月）に言及する際に、『舞姫』のテクストは、ベルリン中枢の制度的な空間、カイゼル帝国の権威と意志を表徴するモニュメンタルな空間の量のしたに抱えこまれていた豊太郎が、エリスの住いがあるクロステル街のエロティックな空間、内側へとぐるを巻いてまわりこむ空間に入りこんで行くものがたりとして解説されるが、この場面であざやかに描きだされているのは、こうした二つの異質な空間の境界を横断する豊太郎の動きである⁽³⁰⁾と述べているように、前田は二項対立的な空間を越境・横断する主体にこそ焦点を当てていく。前田の重要視する空間の連続性は、この越境的な主体乃至身体に認められると、まずは言うて良い。ここに、前田

の身体論的・現象学的手法が明確に表れている。無論、ここでいう主体とは、個人の意志や自我によつて空間を渡り歩くような存在ではなく、構造化された空間により影響を与えられ、意味づけられる対象である。それは、近代的自我の相対化を意図する以下の言説にも表れている。

語り手あるいは作中人物の内面なるものは、ものや街や群衆、つまりは彼と外部世界との関係において立ちあらわれてくるわけであつて、自律した内面は私たちがとらわれている虚構にすぎない。その意味で文学作品に描かれた都市はたんなる背景以上のもの、内面そのものである⁽³¹⁾。

では、構造的に分化されながらも連続している空間において、「生きた空間」乃至「都市の深層的な部分」は、どのように認められていくのだろうか。

『舞姫』の太田豊太郎は、ウンテル・デン・リンデンの制度的な空間から、クロステル街の内密でエロティックな空間へと境界を横断する。この越境は豊太郎にとつて、一種のイニシエーションにはかならなかった。ベルリンという大都会が提供する多様な快楽、他者との出会いの場をかくなく拒みとおしてきた彼は、クロステル街の屋根裏部屋でいとなまれるエリスとの共棲をとおして、生のゆたかさを取りもどして行くのである。

(中略)

もういちど『舞姫』を例にとるならば、このテキスト総体の空間的構造は、外部空間から内部空間に入りこんだ異邦人の豊太郎が、最終的にはエリスを破滅させ、ふたたび外部空間に帰還して行くものごとりと要約される。二つの空間の境界を横断する豊太郎はロトマンのいう動的な登場人物であり、エリスは内部空間に、天方伯と相沢謙吉は外部空間に、それぞれ帰属している不動的登場人物である。とりわけ、豊太郎を無意識の深みにいざなうアニメの役割をつとめるエリスは、近代的なベールリンの中枢部から見捨てられているためにかえつてはるかな中世の記憶を温存させているクロステル街の地^{（32）} 霊に根ざす存在として描きだされている。

前田は、ウンテル・デン・リンデンからクロステル街へと横断する豊太郎について、「この越境は豊太郎にとつて、一種のイニシエーションにはかならなかった」と述べている。「空間のテキスト テクストの空間」をはじめ、『都市空間のなかの文学』に収められたいくつかの論稿を確認すれば分かるように、前田は七〇年代から八〇年代にかけての論壇に大きな影響を与えた文化人類学者山口昌男の議論に大きく依拠している。ここで用いられる「イニシエーション」という語もその代表的なものであるが、構造的な空間に大きく左右された豊太郎の越境には、このような形で「ものがたり」が見出されていく。また、引用波線部にあるように、前田はエリスに、というよりもクロステル街に、中世から続く時間性・歴史性を認めている。「舞姫」について個別に論じた「BERLIN 1888」で詳細

に言及されているように、ウンテル・デン・リンデンを近代的な街路に象徴される空間であるとすれば、クロステル街は近代化の波がいまだ押し寄せていない空間であり、その歴史性ゆえに、エロティックな身体を経験はなされるのである。ここで、前田が都市を構造化して見出そうとしていたものが、空間の時間的な側面、すなわち都市の歴史性であるということができよう。豊太郎をはじめとする作中主体の行動や意志、内面に影響をあたえる空間の構造は、まさに空間に潜む歴史的な意味であり、それゆえ彼らの越境体験は「生きた」ものとして見出されていくのである。

このような、空間的な構造に時間的な意味を見出す論法は、永井荷風「狐」（『中学世界』、一九〇九年一月）を中心的に取り上げた章「廃園の精霊」において顕著に認められる。

さき（引用者注：「廃園の精霊」第一節）に私は、狐狩りの一幕が、崖下の世界にわだかまっていた「母なるもの」の原像を殺戮する祝祭劇であったといったが、歴史的な文脈の中に置きかえてみるならば、それは文明開化の実利的・合理的な世界が、江戸空間のなかにたくわえられていたおどろな記憶を抹殺する象徴劇であったということになるだろう。劇中で「私」の父親に与えられた役割は、暗い木立につつまれた混沌の相のもとに「私」の前に立ちあらわれた崖下の世界に秩序をもたらすこととであり、その多義的な意味を一義的なものに還元することであった。狐の死骸をつきつけられたとき、「母親の柔い袖のかげに顔を蔽ひかくし」た「私」が、父久一郎の生を包摂していた

「文明開化」の男性的な世界から遁走を開始しようとする荷風自身を意味していたことはいうまでもない。「母なるもの」の原像に重ね合わされた江戸空間の記憶を探る荷風の長い遍歴はようやくはじまったばかりなのである。³³⁾

引用部は「廃園の精霊」の結語に相当する部分である。「廃園の精霊」は、二節に分たれており、第一節で「崖上／崖下」という空間的な配置を、「父なるもの／母なるもの」の対比で捉え、構造的に意味づけていく。そして第二節では、その歴史的な意味を掘り起こし、「崖上」父なるもの「明治」が「崖下」母なるもの「江戸」を駆逐する物語を「狐」に見出す。『都市空間のなかの文学』における空間の構造的な分析は、その記号的・構造的な分析の手法において、また主体に個人の意志などが反映される余地がないという点において、たしかに八〇年代の記号論と接点を有するだろう。しかし、前田は八〇年代の記号論と、空間の二項対立的構造分析を明確に分け、むしろ前者を批判するものとして後者を積極的に押し出していく。その際重要視されるのが、第一に空間の連続性と越境的な身体、そして空間が有する時間的なモメント、すなわち歴史性なのである。

以上、八〇年代の都市・都市論に接近しながらも、それを批判する『都市空間のなかの文学』のありようを確認してきたが、これまでの議論の中で十分に論じ切れていないものの一つに、前田の系譜学的手法がある。『都市空間のなかの文学』を一度通読すれば、「BERLIN 1888」や「廃園の精霊」のように、構造的な空間の把握を

通して個別のテキストを分析する系統のものがあ一方で、ある時期の複数のテキストにあるテーマに沿って論じていく系統のものも多いことがわかる。例えば、第Ⅰ部に収められた「澤東の隠れ家」「開化のパノラマ」「塔の思想」「獄舎のユートピア」がそれに相当する。ここで、空間論的・記号論的・構造主義的な手法と両輪をなすような前田の手法として、歴史的な手法があったことが思い出されよう。『都市空間のなかの文学』に収められる論稿を個別に発表しはじめた頃、前田は丁度『幻景の明治』（朝日選書、一九七八年一月）を上梓していたのである。³⁴⁾

暗喩よりも隠喩が優勢な修辞法。意味作用をうばわれたきらびやかな記号のあつまり。人と人との関係が交換価値と物神崇拜によって媒介されている即物的な空間——『東京新繁昌記』が私たちに開示する世界は、西欧文明をもののレベルで受容し、卑屈な拝跪をいとわなかった開化の東京のしんらつな戯画であるにはちがいないが、一方、そこに抽出されているのはまぎれもなく近代的な都市構造の祖型である。そのかぎりでは『東京新繁昌記』のアナクロニズムともいわれるものの実質も、漢文体の空疎で類型的な修辞法が、近代的な都市の透明だが奥行きを欠いた構造を把握する形式として有効性を発揮したというパラドクスに求めなければならないだろう。しかし、書物としての都市を総体的に読み解こうとした撫松の試みは、そのものとも深いところでは文学へのうらぎりを意味していたことともたしかなので、近代の小説はその始発にあたって、都市空間の

なかに人間的な意味をどのように挿入して行くか、という課題をひきうけなければならなかった⁽³⁵⁾。

四 小結

引用部は、「開化のパノラマ」の一節である。ここでは、「悪場所の繁栄から筆を起し、「水の東京」における人々の情緒的なコミユニケーションを描く寺門静軒『江戸繁昌記』（一八三二―三六）」と対比する形で、ものと情報が流通する都市の様相に「流れ」を見出す服部撫松『東京新繁昌記』（一八七四―七六）を論じている。ここで前田は、「悪場所」に代表される空間論的な問題を、文化史的・表現史的なレヴェルで論じ、さらには「水」のイメージに仮託して都市の流動性を認めていく⁽³⁶⁾。そこで重要なのは、『東京新繁昌記』を「意味作用をうばわれたきらびやかな記号のあつまり」として捉え、なおかつそこに「近代的な都市構造の祖型」を見出していることである。これまでの議論を参照すれば、前田は八〇年代的な記号消費型の都市に批判的な眼差しを向け、都市の連続性と歴史性により構造的な空間把握を展開していた。「開化のパノラマ」も系譜学の中にその認識を反映させたものと見ることも可能であるが、『東京新繁昌記』の都市を「記号のあつまり」である「近代的な都市構造の祖型」としてとらえているからには、現代的な都市の問題の源流を文明開化の東京に求めていることは明らかである。ここに、『都市空間のなかの文学』を通じて前田が有していた問題意識、すなわち八〇年代都市の源流として近代の東京を見出し、そこに流動的・歴史的な構造を読み取ること、「生きられた空間」を模索しようとしていたことが、確認できるのではないだろうか。

前田愛『都市空間のなかの文学』は、記号と消費の都市論が流行した一九八〇年代の文脈に合致する要素を多分に有し、今日に至るまでその文脈で評価されてきた。前田は、都市を二項対立的に語る構造主義的な空間論的な都市論を展開していくが、「電話帳」や「ぴあ」の比喻で語られる記号的な都市・都市論には否定的である。前田が評価するのは、都市の流動性や都市を移動する身体であり、空間構造に潜む時間的な軸、すなわち都市の歴史性である。ここに、記号の集成として都市を解釈してきた八〇年代以降の都市論を相対化する契機があるだろう。同時に、前田は現代都市の源流として近代の東京を見出し、そこに流動的・歴史的な構造を読み取ること、「生きられた空間」を模索しようとしていたのではないだろうか。

ここから現在の都市論の地平を考えるならば、都市の連続性と流動性、及び越境的身体を有する主体の問題は重要であろう。前田は、越境する主体そのものよりも、主体の内面を反映し、影響を与える都市構造に関心を示していた。しかし、果たしてそれにより「生きられた空間」を見出すことは可能であろうか。

その日も、持つて行きどころのない心は、私を町から町と唯目的もなくさまよひ歩かせた。何処といふ目的、何といふ目的はないが、何処かへ行つて暫時でも自分といふものを紛らさな

くては、暗くさびしい心の中で企てられる辛い企てが、刻一刻危険な方へ向いて行くやうに感じられて、少しの暇もじつとしてはゐられなかった。見たくもない菊も見た。入りたくもない活動写真にも入った。其処にも此処にも沢山の人がゐて、其等の人々と、其中に立交つてゐる私との間に、超え難い間隔⁽³⁷⁾のある事を思はせた。時々、物を探し求める眼を自分に向けて、私は私の心の状態^{ありさま}を眺めた。(中略)羞恥^{はぢ}は私の全身を襲うた。服装^{みなり}も容貌^{かほかたち}も、為る事、為す事、私は私のすべてに対して、唯限りなき厭悪の情を感じた。⁽³⁷⁾

例えば、右に掲げた石川啄木の未定稿「不穩」には、日露戦後文学に多く見られる無目的に都市を徘徊する主体が描かれている。ここでは浅草を連想させる都市の空間が描かれ、そこに行き来する人々がまさに都市の流動性を体现するかのよう⁽³⁷⁾に思われる。しかし「不穩」の主体は、都市の景物を消費することができていない。すなわちこの主体は、構造に規定されてはいるものの、そこに意味を見出すことができない主体であると言えようが、このような歩行の様態に、都市と身体をめぐる歴史性が確認されよう。このような主体の問題に改めて着目し、主体の身体を介した都市の経験を検討していくことで、「生きられた都市」あるいは「都市を生きること」に迫ることが可能になるのではないだろうか。

なお、記号論・構造的な都市の解釈を試みる一方で、都市の歴史性に焦点を当てていく手法は、必ずしも前田固有のものとは言い得ない。むしろ、都市の歴史性を発掘する手法は前田以前・以後に

も散見され⁽³⁸⁾、そこに記号論・構造的な手法を採用したことに前田の独自性があると言つても良いだろう。しかし、今日における前田やその都市論の評価に鑑みるに、今一度彼の歴史学的手法に着目する意義は大きいように思われる。この問題は、前田が所属していた「都市の会」⁽³⁹⁾の批評家のテキストとの関係性も測定する中で、改めて歴史的に位置付けられるべきであろう。

記号論・構造的な都市論を相対化しつつ、都市の連続性や流動性、越境する身体性に着目し、そこに生きる主体の問題から都市及びその歴史性を測定していくこと——『都市空間のなかの文学』以後の新たな「都市論」の構築は、筆者が今後の課題とするところである。

《注》

(1) 前田愛「空間のテキスト テキストの空間」『都市空間のなかの文学』筑摩書房、一九八二年二月。引用は、ちくま学芸文庫、一九九二年八月、一二頁。

(2) 前田は、「(都市空間) からの読み」(『国文学 解釈と鑑賞』別冊、一九八六年十一月)において、「都市という媒介項を導入することによって、こうした「近代自我」の観念は、相対化され、脱中心化されることになるだろう」と述べ、「語り手あるいは作中人物の内面なるものは、ものや街や群衆、つまりは彼と外部世界との関係において立ちあらわれてくるわけであって、自律した内面は私たちがとらわれている虚構にすぎない。その意味で文学作品に描かれた都市は

たんなる背景以上のもの、内面そのものである」と主張している。

- (3) 田口律男「都市テキスト論」とは何か?」(『都市テキスト論序説』、松籟社、二〇〇六年二月)、一七―一八頁。
- (4) 日高佳紀・西川貴子「はじめに」(日高佳紀・西川貴子編『建築の近代文学誌 外地と内地の西洋表象』、勉誠出版、アジア遊学226、二〇一八年一月)、四―五頁。
- (5) 浅野洋「前田愛著『都市空間のなかの文学』」(『立教大学日本文学』第五〇号、一九八三年七月)。
- (6) 中島国彦「前田愛著『都市空間のなかの文学』」(『日本近代文学』第三〇号、一九八三年一〇月)。
- (7) 米田利昭「前田愛著『都市空間のなかの文学』」(『日本文学』第三二巻第五号、一九八三年五月)。
- (8) 亀井秀雄「前田愛著『都市空間のなかの文学』」(『国語と国文学』第六一巻第六号、一九八四年一月)。
- (9) 斎藤美奈子+成田龍一「なぜいま「一九八〇年代」か」(斎藤美奈子・成田龍一編著『1980年代』、河出ブックス、二〇一六年二月)、一一―一二頁。斎藤・成田は「戦後」ないし「近代」の大きな転換点だった八〇年代に芽吹き、定着した思想や文化の「経年劣化」が目立ちはじめた時代、それが現在(二〇一〇代半ば)だといえるかもしれません」とも述べている。
- (10) 大澤聡「八〇年代日本の思想地図——外部と党派性、あるいは最後の教養主義」(斎藤美奈子・成田龍一編著『1980年代』、注(9)前掲)、一五六―一五七頁。なお、この時代の「ニューアカブーム」について、「シラケ」つつ「ノル」ことにこの時代の特徴を見た浅田彰『構造と力 記号論を超えて』(勁草書房、一九八三年九月)の存在は看過できない。
- (11) 吉見俊哉「盛り場へのアプローチ」(『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』、弘文堂、一九八七年七月。引用は、河出文庫、二〇〇八年十二月)、一〇―一一頁。
- (12) 若林幹夫「東京論の系譜②——1973年以降」(吉見俊哉・若林幹夫編著『東京スタディーズ』、紀伊国屋書店、二〇〇五年四月)、二四六頁。
- (13) 若林幹夫「都市空間の現在」(『都市への／からの視線』、青弓社、二〇〇三年一〇月)、五一―五二頁。
- (14) 北田暁大「(八〇年代)渋谷の神話と構造」(『増補 広告都市・東京 その誕生と死』、ちくま学芸文庫、二〇一一年七月)、八〇―八二頁。
- (15) デイズニールランドと一九八〇年代都市の関係性については、吉見俊哉「遊園地のユートピア」『デイズニールランド化する都市』(『リアリティ・トランジット』、紀伊国屋書店、一九九六年二月)参照。なお、若林幹夫「なめらかで均質な空間が顕在化し始めた時代」(斎藤美奈子・成田龍一編著『1980年代』、注(9)前掲)等で述べられているように、八〇年代の都市を渋谷・パルコや東京デイズニールランドに回収する形で論じることが相対化されつつある。
- (16) 若林幹夫、注(15)前掲書、二八五―二八六頁。
- (17) 若林幹夫、注(13)前掲書、五三頁。なお、原宏之『バブル文化論(ポスト戦後)』としての一九八〇年代』(慶應義塾大学出版会、二〇

○六年六月）はこの時代の社会を「平板化」という語を以て捉える。原によれば、例えばファッションの領域では、「お洒落」のイメージ記号であった「ブランド品」「インポート品」がカタログ的な雑誌メディアにより広められ、大衆化し、価値（希少性）は下落するものの価格は上昇した。このような「平板化」した社会や文化の様相は、当時の都市空間をめぐる言説と重なりを見せる。

- (18) 川本三郎「無機的都市の悪夢」『都市の感受性』、筑摩書房、一九八四年三月、一五～一六頁。

- (19) 川本三郎「都市」の中の作家たち——村上春樹と村上龍をめぐる——『都市の感受性』、注(18)前掲。初出は『文学界』、一九八一年一月、五五～五六頁。

- (20) 同、五四頁。

- (21) 川本三郎・村上春樹「R・チャンドラ——あるいは都市小説について」『ユリイカ』第一四巻第七号、一九八二年七月。のち、川本三郎『都市の風景学』、駸々堂出版、一九八五年一〇月）参照。

- (22) 田中康夫『なんとなく、クリスタル』（河出文庫、新装版、二〇一三年一月）、一四～一五頁。

- (23) 北田暁大、注(14)前掲書、七九頁。

- (24) 前田愛、注(1)前掲書、六二～六三頁。

- (25) 同、二二～二四頁。

- (26) 前田愛は「紙のうえの都市」（『都市空間のなかの文学』、注(1)前掲、五四四頁）において以下のように述べている。

商品のデイズプレイが私たちにさしむけているきらびやかなイメージは、テレビのCM、新聞雑誌のイラストやグラフィック

クをとおしてほとんど無限に増殖する。さらに声と文字がこのイメージを効果的に補強する。欲望を際限なく挑発する消費の記号としてのコトバとイメージによって自分たちが包囲されているという感覚。ものとひととの結合がひとひとの結合に先行しているという認識。こうした感覚と認識が日常的なものになっていくからこそ、若い世代は自分たちのコトバ、仲間たちのコミュニケーションをつくりだすことに執着するのである。

ここでは、タウン情報誌の「地」の上に、「図」としてのイメージを紡ぎ出すエンターテインメント誌のありようを指摘し、それらが「シラケ」つつ「ノル」若い世代へ最新情報とイメージを提供すると述べている。

- (27) 前田愛、注(2)前掲論文。

- (28) 同。

- (29) 前田愛、注(1)前掲書、一九頁。

- (30) 同、三三頁。

- (31) 前田愛、注(2)前掲論文。

- (32) 前田愛、注(1)前掲書、四二～四四頁。

- (33) 前田愛「廃園の精霊」『都市空間のなかの文学』、注(1)前掲、一七一～一七二頁。

- (34) 他にも、前田の歴史学的手法が顕著に見られる成果として、『近代読者の成立』（有精堂、一九七三年一月）等がある。前田の成果を評価するにあたり、『都市空間のなかの文学』や『増補 文学テクスト入門』（ちくま学芸文庫、一九九三年九月）等に顕著な記号論的・

構造論的な論稿に注目が集められる嫌いがあるが、歴史学的手法は彼のキャリアに一貫するアプローチとして今一度再評価されるべきであろう。

- (35) 前田愛「開化のパノラマ」『都市空間のなかの文学』、注(1)前掲、一四四頁。

- (36) 「水」のイメージに仮託された都市の流動性については、『都市空間のなかの文学』刊行当時から既に注目がなされていた。例えば亀井秀雄(注(8)前掲論文)は、「前田愛にとって都市空間はもっぱら「制度」の視点でとらえられ、そのなかの歴史(時間)の軋みと言うか、あるいは「制度」によって「裏」や「闇」のほうに押しやられてしまった歴史の澱みと言うか、とにかく水のイメージがほとんど偏執的に文学と結びついている」として、「いわば〈制度〉の枠組みでありながらその〈制度〉が溶解し流出してしまう領域こそが、「都市空間のなかの文学」を成立させる場所だったわけである」と述べ、「前田愛が水の領域をとらえた考察は精彩に富み、説得力が大きい」と評価している。畑有三(『国文学 解釈と教材の研究』第二八巻第五号、一九八三年四月)も、「流動する近代のアナロジイとしての流動する文学テキストを、流動の相のままに浮かび上がらせる」と『都市空間のなかの文学』を評価している。

- (37) 石川啄木「不穩」(小節断片、執筆年月未詳。引用は『石川啄木全集』第六巻、筑摩書房、一九七八年六月)、三二六―三二七頁。なお、「不穩」をはじめとする日露戦後における無目的な歩行の形態については、拙稿「永井荷風「放蕩」における都市歩行——日露戦後文学と意志をめぐる問題——」(『日本文芸論叢』第二八号、二〇一

九年三月) 参照。

- (38) 例えば、磯田光一『思想としての東京』(国文社、一九七八年一月)、鈴木博之『東京の地^{デニウス・ロキ}霊』(文芸春秋、一九九〇年五月)等。

- (39) 前田愛「あとがき」(『都市空間のなかの文学』、注(1)前掲、六三二―六三三頁)の以下の記述を参照。なかでも多木浩二『生きられた家——経験と象徴』(青土社、一九八四年三月)、同『都市の政治学』(岩波新書、一九九四年二月)等は、前田の都市論・空間論を歴史的に位置付ける上で重要であるように思われる。

この本がでるまでには、じつにたくさんの人びとの恩恵をこうむっている。とりわけ、市川浩・河合隼雄・多木浩二・中村雄二郎・山口昌男の諸氏と、ここ数年来不定期で会合をもっている「都市の会」からは、すくなくらず啓発された。「獄舎のユートピア」[BERLIN 1881]「二階の下宿」などのエッセイは、この会で報告したものが原型になっている。

【付記】本稿は、日本近代文学若手研究者フォーラム、オンライン・シンポジウム「前田愛『都市空間のなかの文学』から考える」(オンライン開催、二〇二一年四月二五日)における口頭発表「一九八〇年代テキストとしての前田愛『都市空間のなかの文学』に基づく。会場内外でご指導いただいた方々、とりわけ共にパネリストを務めた田口律男氏、服部徹也氏、安藤優一氏、運営の中山新也氏に感謝申し上げます。

——ひろせ・こうや／博士課程後期三年——